３つの森林活動

みなさまの参加を
お待ちしております

小原本陣の森

第１・３日曜日

知足の森

第１・３日曜日

相模湖・嵐山の森

不定期活動

News Letter

NPO法人緑のダム北相模
midorinodam.jp

No.506

新年の活動が始まりました。初参加者３本の間伐！

【定例活動報告】
相模湖・嵐山の森

緑のダム北相模は相模原市内で活動する森林ボランティアです。急がず、無理せず、楽しく、休まず、 ボチボチと・・。

第３日曜日の活動より

　スキーシーズンに突入したが、相変わらず温暖な気候が続く中での活動日だ。学生にとっては進路を決める受験のピークなので、学生の参加はいつもになく少なかった。こんな日は日頃できない作業を進めるに限る。
従来から気になっていた木工小屋のあったスペースに山積みにして保管していた垂木材、棟木材は乾燥小屋を完成させるために用意していた材木であるが、移転のために崩したため不要になった材である。今回は、乾燥小屋は崩し新地で新たに再建する予定がないため垂木など材を小原のお花畑にあ

る四阿横の空き地に移転させた。
　ところで、「四阿」とも「東屋」ともいう建造物はなぜ「アズマヤ」と呼ぶのかについて、解説をしておきたい。「四阿」（あずまや）の阿は棟の意味で、四方に軒を下した寄棟や宝形造などの屋根を持つ建造物をいう。休憩場所として庭園内に設けられた建物を言います。四阿の傍らにある敬遠内に設けられ、四阿の傍らにある鹿威しの響きが和風の風流を醸し出します。「東屋」（あづまや）の東屋の意味は屋根を四方に下した建物を言い、「四阿」と「東屋」はほぼ同義語と考えられる。

　昨今は集中豪雨等による災害、被害が全国的に多くなり気がかりである。
・防災や地域振興との連携・防災都市計画等との連携を考える時代に変わっていることを自覚して次世代の環境保全、「防災と自然保護」新しい自然保護のながれを考える時代になったと思う。相反するとも思われる「安全」と「自然」を満たす活動がこれからの課題になると感じる。

小林　照夫（本会、理事）

【定例活動報告】知足の森

第３日曜日の活動より

　新年最初の活動、中高生１１名での森林整備。嵐山の森での活動、片付けもいよいよ大詰め。まずはあちこちに埋まっているお花畑の大谷石の作業。小林さんの報告にあるように、この大谷石をトラックで運べる農道まで運ぶ作業のめどがついたところで、間伐作業とで並行して行うことになった。森ではもう何年前から始めたかわからないが今年１年の安全祈願のための間伐。特に根拠のない安全祈願だが、俗にいう願かけに近いものとなっている。無事に倒せれば今年１年間いい活動ができる、と願いを込めて。参加者を３人ずつ３チームにわけて、１チーム１本ずつ宮村、粟田さんと二藤さん、滝澤さんとで指導。活動に参加した中学生の感想をご紹介します。

　今回で二度目となる活動だったが前回よりも積極的に活動することができた。
　森の中に入ると空気が一転し、その魅力に惹きつけられる感覚がある。何十年もかけて育った木たちの中で耳を澄ますと動物の鳴き声、そして降雪で高く伸びた木の葉に積もった雪が落ちてくる光景も見られ、なんとも言えない安らぎを味わうことができた。
　参加者のほとんどが初対面であったが解散する頃には一つのチームとしての仲間意識が形成されていたと思う。若手は11名で３つのグループに分かれ、間伐の作業を行なった。間伐はとても大変な作業のうえ気温が低く「寒い」「キツイ」「疲れた」などの声もよく聞こえた。しかし、その場にいるみんなが自分の力を振り絞り、懸命に作業する姿はお互いの刺激になっていたはずだ。疲れた時に顔を上げるとそこには私と同じ様に疲れているのに一生懸命作業をする仲間がいる、それだけで「もう少し頑張ろう」という原動力が生まれる。そして終わった時の達成感は大きく、疲れているのに自然と笑みが浮かび上がる。
　初めは森の中に入り木を切ることに不安の気持ちがあったが徐々に道具を持った時に高揚感を感じるようになった。
　これから先、環境を守っていくためには若い世代が環境に対して興味を持ち、自ら積極的に考え、行動していくことが大切だ。そのためにもまずは私からこれからの活動を通して環境への興味や知識を育むことができると良いと感じている。

大西　真由
（東京学芸大学附属小金井中学校２年）

桜井尚武の森のコラム

「アブラチャン（*Lindera praecox*）」

図1 葉

20180519高尾山

クスノキ科クロモジ属の落葉低木で小振りの楕円形の葉が互生します。葉柄部が赤紫色をしているのが特徴です（図1）。小枝を折ったり葉をむしったりした跡からこの属特有の比較的強い香りを発します。本州から九州の低山から山地帯にかけて分布し普通に見られます。雌雄異株で春先の開葉前に黄色い花を前年発生の枝の芽脇に数個づつ付けて結構目立ちます（図2）。直径1cmにも満たない小さな花ですが近くで見ると半透明の花の塊りはこれも結構目立ちます（図3）。

図2 春の花

20190407馬頭刈山

アブラチャンを漢字で書くと「油瀝青」、瀝青とはタールやピッチなど粘着性のある物質の総称ですから油の塊というほどの意味でしょう。身近にあり幅広く使われた植物なので各地に様々な呼び名があります。その中にジシャという名前がありアブラジシャがなまってアブラチャンになったという説がありました。また、標準和名をつけるにあたり、英語の瀝青にあたるChian turpentineに由来するチャンを使ったという説もあります。なお、Chian turpentineとはカナリア諸島から地中海地域に分布するテレビンノキ(Pistacia terebinthus、ウルシ科) から採る含油樹脂のことでした。

この種は名前の通り油を多く含むので生木でもよく燃えるといい、薪や松明に使われたそうです。果実は15㎜位になり油分を多く含み灯明や鬢付け油等に使われたそうです（図4）。また、大きくはならないものの良くしなり、ねじれに強いのでカンジキの輪にしたり、屋根葺き用の茅の結束や、木材の流送する時の材の結束などに使ったりと日常的に使われたそうです。。

図3 雄花　20190407馬頭刈山

図4　果実　20181104_青梅丘陵

桜井　尚武（本会、会員）

【若者の森づくり】
ForesTo Class

嵐山体験間伐と新エリアへの経路づくり

今回は新年はじめの活動となり、うっすら雪が被さった山々を見ながらスタートしました。午前中は嵐山の花畑にあったテラス用の石を搬出する作業と学生達の体験間伐のサポート。午後からは新エリアとして考えている長福寺さんの知足の森へ入る経路の整備を実施しました。

～嵐山での石の搬出、体験間伐～

朝一番は前日の雪の影響かとても冷え込み今期1番の寒さでの活動開始。はじめは嵐山での旧花畑班がつくろうとしていたテラスの石の搬出を手伝いました。1人では持てない石を若手メンバー主体に15名程で一気に片していきます。

私は高校生2名とForesTo Classメンバー2名の4人でスリングに石を通して4点で運ぶ手法で取り組みました。寒さが吹き飛ぶ力仕事で朝の作業としては気持ち良かったです。はじめは時間がかかると思った作業もこれだけの人数をかければ1時間程度で完了し、作業をする範囲に対してどれだけ人を投入するべきかによって効率もかなり変わってくると感じました。

その後は新しく参加した学生メンバーもいることから3班に分かれて体験間伐作業の実施を行いました。はじめは人見知りしていたメンバーもみんなで協力して作業にあたることで一体感が生まれ、木が倒れた瞬間の達成感も高まった印象でした。自分は前回の反省点を踏まえ、段取り8割を意識して受け口の方向を誤らないようにサポートしました。先月の間伐作業よりは平らな場所で木々の間も広いスペースはあるものの、狙い通り水平にノコギリで切っていくのは難しいので修正を促していきました。結果的に3班ともかかりぎにならずに成功しました。

～新エリアへの経路づくり～

前回の活動でも課題としてあげた、小原エリア知足の森への経路について。午後からはそこに着目してForesTo Classメンバー2人で作業を開始しました。

昨年秋の大型台風の影響でフィールドへ入る経路が全くなくなっており、足を取られながら向かっていかなければなりません。今回は倉庫から直接フィールドのふもとまでいける簡易経路の作成にあたりました。作業はクワで重労働が予想されましたが、やり方は簡単で斜面の上から崩して行き、40ー50センチ程度平らにして行くだけ。

ポイントは雨などで水がたまらないように平らにして行きながら、斜面の下にあたる方向へなだからに土をならしていきます。途中で間伐材が横に倒されて道のようになっており、見通しが立ち、スムーズに作業も進みました。

最終的に沢にかかっている即席の橋のところまで通過させることができ、倉庫から1分30秒から2分で到達することができるようになりました。

作業後は達成感に浸りながら、緑のダム北相模の新年会に参加することができました。

来月からいよいよ奥地への経路を広げて行き、間伐が必要な込み合ったエリアへ入って行きたいと思います。

滝澤　康至（ForesTo Class）

■ 林業プロの視点 ～二藤の眼～

新年最初の活動はこれから作業に入らせてもらう知足の森の作業歩道の整備を滝澤と２人でさせてもらいました。

まず作業歩道というものはなんぞや？という事ですが、簡単にいうと作業する場所に行くまでの

通い道の事です。自分は仕事でもこの作業歩道の整備はちょくちょくする事があるのですが、この道があるのとないのとではその目的地までの到達時間やその歩く人の負担・安全性も全然変わってきます。

特に山は斜面であり、歩く地面の状態も滑りやすかったりと歩き難い所が多いです。よって、この通い道は重要になってきます。

そして、道を作っていく上でもその道をどういう人が歩くのか、山歩きに慣れている人なのか、全然慣れていない子供や年配の方も歩くのか、その対象によって道の勾配や作っていくコースも変えていかないといけません。

全ての道がそのような細かい意図や思いが込められているとは限りませんが、何気なく歩いてる道、車で通る道のほとんどはその通る人の事を思う作り手の魂が込められています。それは道づくりだけでなく、間伐だったり他の作業も同じです。

これから知足の森の整備を進めていくにあたって、そのような作業歩道はまだまだ整備不足なのでまずはある程度の道づくりを進め、一緒に活動していく子達が作業をし易い環境を整えていく。そして、作業をしない人でも気軽に山に触れられるような道を作っていけたらなと思います。

二藤　政毅（ForesTo Class）

【若者の森づくり】
地球環境部

さがみはら100人カイギにてプレゼンテーション

さがみはら100人カイギを通して、人に自分の体験を伝える面白さを感じた。自分たちの体験が、人に伝わっていくことで、その人たちの体験と交わり合って、また新たな可能性が生まれる。そんな可能性を感じた、一日だった。

消費者生活センターに勤めている方からは、どう間伐材を使い、エコマークなどがついたものを買ってもらうか、とか、SDGsにどう貢献できるかなど、お話ししていただいた。また、この100人カイギの運営の方からは、春日部の高校で、生徒会が集まるところみたいのがあり、そこにこのNPO法人緑のダム北相模の話をもっていったら面白いのではないかという話もしていただいた。今日宮村さんも語っていた、結局人のつながりが大切なんだよという言葉を体感した。うまく伝えることができて、良かったと思う。

長坂　裕太（国際基督教大学高校２年）

児童館で積み木を活用いただきました

今回は、児童館が行う通常の広報の他に地域の学生にチラシを作成して頂き、お陰様で乳幼児から大人まで多くの方の参加がありました。

当日は晴天で、大きな窓が並んだ遊戯室はお日様が当たってポカポカして、１万個の積み木の良い香りで包まれていました。そこには、ゆったりとした時間の中で、子どもと大人、親子や友だち、初めて会った人同士が、積み木を介して語らい、創造性を膨らませ、協力し、微笑み合いながら（時々、兄弟ケンカも）、ふれあうことができる空間がありました。

積み木イベントを通じて人と人がつながり、また、間伐材や森林づくりについて知り、学び、思いを馳せ、理解を深めることで人と自然がつながる機会を地域に提供することができました。

地域の児童館の小さなイベントではありましたが、参加者や職員、関わった全ての人の心の中に、北相模のみなさまの活動や思いが種となって撒かれたことと思います。

昨年より、関係者の皆様には当児童館にご協力いただきまして、今年も再び積み木イベントを実施することができましたこと、心より感謝いたします。 ありがとうございました。

森田　加代子
（小金井市東児童館）

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前に集合です。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、昼食

NPO法人
緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
現地事務局：〒252-0172　相模原市緑区与瀬本町12　かどや食堂内
発行人：NPO緑のダム北相模
支援団体：セブン-イレブン記念財団
積水ハウスマッチングプログラム、国土緑化推進機構

協働団体：神奈川県、相模原市、麻布大学、マルモ出版、
東京学芸大学環境教育研究センター、
（社）さがみ湖 森・モノづくり研究所、ウッドバンク㈱

フォレストサポーターズ　www.mori-zukuri.jp
緑の募金
一般財団法人 セブン-イレブン記念財団
SEKISUI HOUSE MATCHING PROGRAM